

礼拝のしおり (2021年2月号)

～主の御前に一つにされて～

すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。(コリントの信徒への手紙一

9章22節後半～23節)



墨と絵の具を使った年長組の画家たち
(教会附属角笛幼稚園)

主の聖名を讃美いたします。約1年に及ぶ新型コロナウイルスのパンデミックという状況の中で、深い疲れを覚えておられる方が多くおられることと思います。お一人おひとりの上に、主が豊かな癒しと平安をお与えくださいますように、お祈りいたします。

人が集まって何かをすることが難しい状況の中で、今まで以上にインターネットを利用した活動が多方面で行われるようになりました。多くのキリスト教会もまた、教会堂に集うことが出来ない現実に直面して、礼拝や諸集会をインターネットを利用して行うようになりました。今後も、新型コロナウイルスの感染とそのことによる不安が完全に払拭されない限りは、教会でもインターネットの利用がさまざまな形で検討され、行われていくことになるであろうと思います。

しかし、キリスト教会に生きる私たちが、インターネットを利用して主日の礼拝を配信したり、諸集会を行ったりするところでも、やはり忘れてはならないことがあります。その一つは、特にキリスト教会がなし続けてきた礼拝は、インターネットを介したものに完全に置き換えることはできないということです。私たちが神を礼拝するために結集するところに神が臨んでいてくださるという、聖書に基づき、キリスト教会が生きてきた信仰を私たちも受け継いでいるからです。感染が収束に向かうところでは、やはり再び私たちが集まって礼拝を捧げ、交わりを持つような方向へと向かっていくことを、やはり重んじ、中心に据えていく必要があることを覚えます。

そして、インターネットを利用した教会の活動をさまざまに行っていく中でも、今一つ忘れてはならないことがあります。インターネットを利用できない方々のことです。その方々にも、どのようにして御言葉を届けることができるか、その道をもさまざまに模索していく必要があります。個人的なことですが、私自身はSNSにどうも苦手意識があります。古いタイプの人間に属するというべきか、誰かと話す時には、できれば会って話したいと思います。ただ、私のような者でも、改めて思いますことは、今のような誰かと会うことが制限されている状況の中では、インターネットの技術がその困難を乗り越える一つの道をも与えてくれているという事実です。

教会におけるインターネットの利用の是非については、さまざまなご意見があるかと思いますが、しかし、単純な「あれかこれか」ではないように思います。キリスト教会は、その信仰において、いつの時代も、時代の状況に呑み込まれてしまう訳にはいかない面があります。そのことを忘れる訳にはいきません。しかし、やはり私たちは、21世紀という現代の教会に生きています。私たちが福音を宣べ伝えていく人々もまた、21世紀の現代に生きる人たちです。そして、ひと口に「現代」と言っても、そこにもさまざまな年代の人たちがあり、同じ年代であっても、またいろいろな意識を持って生きている人たちがいます。その人たち一人ひとりに、どうやって御言葉を伝え、主イエス・キリストの福音を証ししていくことができるか。「あれかこれか」ではなく、可能な限り、さまざまな伝道の道を模索していくべき時を、今改めて与えられているのだと思います。

「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです」。今こそ、パウロの心を私たち自身の心として伝道に向かうべき時なのだと思います。

高井戸教会牧師 七條真明

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
2月21日(日) 受難節第一主日	イザヤ書 6章9～13節 マタイによる福音書 13章1～23節 「神の言葉が実を結ぶならば」	詩編 119編 169～176節	24, 57, 463, 28
2月28日(日) 受難節第二主日	ミカ書 7章8～10節 マタイによる福音書 13章24～43節 「たとえ毒麦が現れても」	詩編 40編	83, 300, 377, 29
3月7日(日) 受難節第三主日	ヨブ記 28章20～28節 マタイによる福音書 13章44～52節 「隠されている宝」	詩編 42編	299, 441, 522, 26
3月14日(日) 受難節第四主日	説教者 高橋 幸 神学生(予定) 聖書・説教題等は未定です。	未定	未定

☆2月21日以降の主日礼拝、その他の集会等について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮しつつ、2月21日以降の高井戸教会の主日礼拝、その他の諸集会については、以下のとおりといたします。

◎主日礼拝について

昨年11月半ば頃から新型コロナウイルスの感染が急速に拡大してきたことを受けて、11月22日以降、主日の礼拝は、午前10時30分からの1回のみとし、礼拝堂では牧師と礼拝で役割を担う長老のみで捧げることとして現在に至っています。2月に入って、全国的に、また東京都でも新規感染者数が少なくなってきました。主日の礼拝に関しては、いずれかの時点で、再び朝礼拝を2回に分散して行う形にして、礼拝堂に集っていただくことが可能になるかと思えます。ただし、感染が起らないように、いつそのようにできるかの判断については慎重に見極める必要があります。そのため、今しばらくは、礼拝堂に集うことを制限する形が続き、みなさまには、なお引き続き忍耐をしていただくこととなりますが、どうぞご理解の上、ご自宅で祈りを捧げていただきたくお願いいたします。

また、今後も感染状況が変化していくであろうことを見据えて、現在、主日礼拝のライブ配信を行うことも検討しているところです。ただし、ライブ配信が行われるようになって、「礼拝のしおり」の発行、主日礼拝における説教の動画の配信は続けていく予定です。

◎子どもの教会、その他の諸集会について

子どもの教会は、幼小科は現在休止中ですが、4月3日(土)に柏の宮公園においてイースター礼拝を行い、互いに十分な距離をとった上で朝食を共にする予定です。また、中高科は毎月1回のリモートでの礼拝と交わりを続けています。

また、その他の集会については、インターネットを介した形で行う準備をしています。教会員の方々には、そのための資料をお送りしますので、どうぞお読みください。ただし、インターネットを介した集会を行う場合にも、教会堂に赴く形で集会に出席したい方にはそのご意向に沿うことができるようにしたいと願っています。少し時間をいただくことになるかもしれませんが、どうぞ祈りつつお待ちくださいますようお願いいたします。

「招きの御声が聞こえるか」(マタイ 11章 25~30節) 牧師 七條真明

新たな主の年 2021 年を迎えました。いつも、こうして新年を迎える時、私自身が改めて思うことは、キリスト教会が歩いていく道、新しく迎えた 1 年という時の中を一体何をなして進んで行くのか、そのことは年が変わっても変わることはない、というそのことです。この年も、何よりも、主の日ごとに神の御前に礼拝を捧げて歩み続ける。キリスト教会が、約 2000 年の間続けてきた、その歩みの最も中心にあり続けたことを、この 1 年も終わりまでなし続けていくのだということです。

そして、教会に生きる私たちの中心にいつもいてくださる御方、救い主、主イエス・キリストが、どのような時も、主の日ごとに礼拝を捧げる私たちの先頭に立つようにしておられるのだということを思います。新たな年を迎えた主の日に与えられたマタイ福音書第 11 章 25 節以下の御言葉が、そのことを私たちに示してくれている。そう思えてなりません。

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます』。御子なる神、人となってこの世界に来てくださった神の独り子が、その地上におけるご生涯の中で、お語りになった御言葉です。この地上世界から、天地万物を創造され、今も続べ治めておられる、天地の主であられる神さま、父なる神さまに向けられた、ほめたたえの言葉。父ある神を崇め、讚美する言葉でありました。

キリスト教会が、主の日ごとに共に集い、神を礼拝し、崇め、讚美し、御言葉を聞いて、祈り続けてきたのは、私たちの日々が、ただ目に見える、目の前の世界だけで成り立っているのではなく、天地の造り主であられ、私たち人間をも創造なさった神の御前にある日々であることを覚え続けるためでありました。そのために、主イエス・キリストは、天を仰ぎ、父なる神に呼びかけ、讚美なさるところから、改めて御言葉を語られました。どのような中であっても、私たちが、天地の主である神をほめたたえ、讚美するところから始めて行く。主イエスの御声に、私たちの声を合わせて歩み続けていくことを私たちが学ぶためでありました。

そして、天地の主であられる神をほめたたえる言葉を語られた主イエスは、ご自身へと招かれる、招きの御言葉を、私たち一人ひとりに向けてお語りになります。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

「疲れた者、重荷を負う者」とは、一体どのような者たちのことでしょうか。説明の必要などなく、誰もが、ほかでもない私、この自分のことだと思います。ウイルスの感染が拡大し続ける中で、恐れや不安をいつも心に抱き、絶えずどこかで緊張しながら生きている私たちがいます。誰もが疲れを覚えている。負わされている重荷に押しつぶされるようにして喘いでいるのです。

しかし、果たして、主イエスが、ここで語られている「疲れた者、重荷を負う者」というのは、単純にそのような「疲れ」、「重荷」ということなのでしょう。いや、むしろ主イエスは、私たち人間のもっと深いところに巣くっているものから来る疲れや重荷を見ておられるのではないのでしょうか。今のような状況の中で初めて私たちの中に生じたというようなものではない、元気に歩み続けられていたと私たちが思っていたような中でも、私たちが神に背を向け、神などおられないかのようにしばしば生きているところで私たちの誰もが抱え込んでいた、神の御前における罪から来る、私たちの手ではどうしようもなく深く拭い去りがたい疲れ、重荷による喘ぎを、主イエスは、私たち一人ひとりのうちに見ていてくださるからこそ、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも、わたしのもとに来なさい」と、私たちをご自身のもとへお招きになるのです。

私たち人間が、この地上で人生を生きる時にどうしようもなく抱え込んでいる、神の御前における罪の重荷があります。人生を生きる限り、積み重なる重荷。心の奥深くにあって私たちが苦しめ、ある時、私たちがその肩にどさっと負っている自分の重荷であることに気づかされたりするその重荷を、主イエスは、十字架において、私たちの代わりに、命をかけて負ってくださる救い主として来てくださいました。その御方の十字架のもとで、そこに神さまの赦しがあるから、重荷をおろして休むことができる。赦されている。神さまの大きな赦しの愛の中で生きている。だから、生き続けられる。どのような時も、足が痛み、とぼとぼと歩かねばならない時も前へと歩き続けられる。そのような、救い主であられる神の御子イエス・キリストの十字架のもとで、この御方から与えられる休息、安息というものがあるのです。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。新たに迎えたこの年を生きる私たち一人ひとりに、主イエスの招きの御声が向けられています。